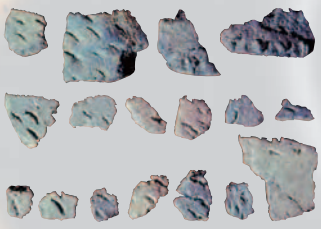
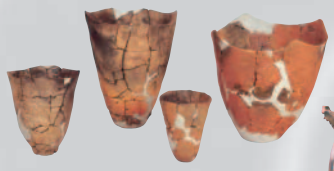


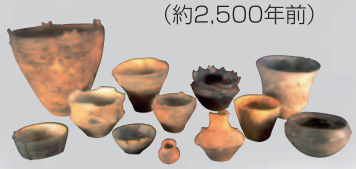
縄文時代の土器
（約10,000年前）



縄文時代の土器
（約6,000年前）

縄文時代の土器
（約4,500年前）

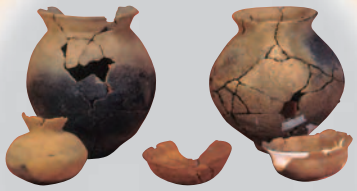
縄文時代の土器
（約2,500年前）



弥生時代の土器

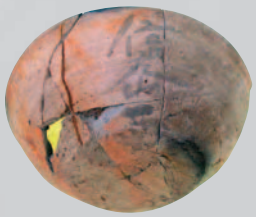
福島市の遺跡 1

Sites of Fukushima city



古墳時代の土器

古墳時代の土器



文字が書かれている
平安時代の土器

平安時代の土器

奈良時代の土器

福島市教育委員会

はじめに

福島市内には1000箇所を超える遺跡(いせき)があり、およそ２万年前の旧石器時代(きゅうせっきじだい)から江戸時代までの人々が生活をした痕跡(こんせき)を今に伝えています。

福島市では、これまで60箇所以上の遺跡の発掘調査を行ない、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代の人々の生活の様子や社会の様子が明らかになっています。

遺跡はどこにあるのでしょうか？じつは、私たちが普段(ふだん)とおっている道のすぐそばに遺跡はあります。身近なところに、私たちの生活の土台となった先人が残した生活の跡が埋まっているのです。

福島市でも、社会の教科書に書かれている時代に、私たちの祖先が、生活をしていたのです。

この本は、これまで発掘調査を実施した遺跡の中から、先人の暮らしぶりがよくわかる遺跡を選び、発掘調査で明らかになった先人の生活の様子を伝えることを目的に作成しました。

いつの時代に、どのように先人が生活をしていたのか知っていただき、学校での調べ学習で活用していただきたいと思います。

目次

発掘調査とは …… 1
市内の移り変わり …… 2
福島城跡 …… 3
北五老内遺跡・腰浜廃寺跡 …… 4
五十辺遺跡 …… 5
勝口前畑遺跡 …… 6
山ノ下遺跡 …… 8
岩田遺跡 …… 9
岩崎町遺跡 …… 10
房ノ内遺跡 …… 11
八郎内遺跡 …… 12
浜井場古墳群 …… 13
学壇遺跡群 …… 14
高畑遺跡 …… 16
御山千軒遺跡 …… 17
月ノ輪山１号墳 …… 18
上ノ平古墳群 …… 19
台畑遺跡 …… 20
倉ノ前遺跡 …… 22
本内館跡 …… 23
鎌田館跡 …… 24
富塚前遺跡 …… 25
青柳遺跡 …… 26
宮代館跡 …… 27
用語集 …… 28
年表 …… 30

はっくつちょうさ
発掘調査とは

日本に残る建築物は、７世紀の法隆寺金堂が最古のものです。それ以前の建物は木や植物で作られていたため、腐ってしまい残っていません。

福島市では、約２万年前から現在まで人間が生活をしていました。どんな家に住み、どんな生活をしていたかを知る手がかりが発掘調査なのです。

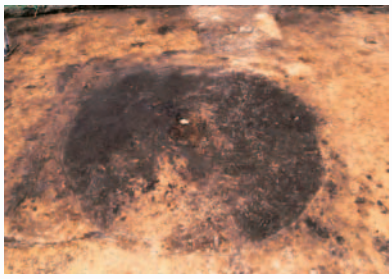
発掘調査では、当時の家の跡や柱を立てた穴、井戸、食料をたくわえた穴、墓などの様子や土器や石器などの道具から、人々がどのように生活をしていたのかを知ることができます。

発掘調査の様子

発掘調査では家の跡などのほかに、当時使われていた土器などもみつかり、生活の様子を知ることができます。

発掘調査では地面を平らに削って、当時の地面をていねいに調べることからはじまります。

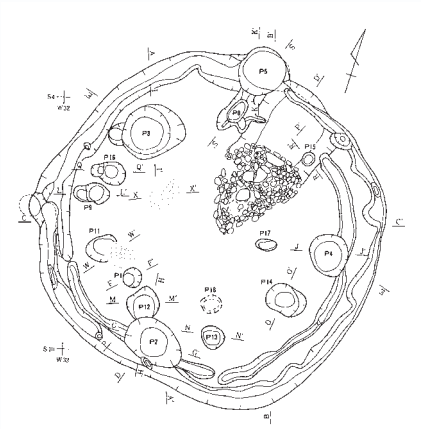
竪穴住居の調査の様子



竪穴住居を発見した様子です。中央の黒い円が竪穴住居です。

竪穴住居を掘っている様子です。へらで少しずつ掘っていきます。

竪穴住居を掘り上げた様子です。柱の穴の大きさや深さを確認したり、当時のいろりなどを調べます。



◀竪穴住居の図面
右上の写真まで調査が進んだ段階で、写真を撮影し、図面を作成します。左の図は右上の竪穴住居の図面です。竪穴住居の形や大きさ、柱の位置と大きさ、いろりなどを図にします。

しないのうつりかわり

市内の移り変わり

福島市でみつかっている最も古い生活の跡は、今からおよそ２万～１万５千年前に石器を作った場所（黒岩・学壇遺跡）で旧石器時代のものです。

やがて縄文時代が始まると、人々は竪穴住居を作って住むようになります。市内で最も古い住居跡（松川町・仙台内前遺跡）は縄文時代が始まってまもなく作られたもので、およそ１万年前のものと考えられます。その後、次第に家の数がふえてむらを作るようになり、縄文時代もなかばをすぎると、川の近くに大規模なむらが作られるようになります(飯坂町・月崎Ａ遺跡、松川町水原・宇輪台遺跡、荒井・愛宕原遺跡、飯野町・和台遺跡など)。岡島・宮畑遺跡にむらができたのもこの頃です。

弥生時代のむらについてはみつかっていないため詳しくはわかっていませんが、勾玉や矢じりを作っていた場所や水田跡（野田町・勝口前畑遺跡）のほか、お墓の跡（佐原・大平後関遺跡）などがみつかっています。これらのことから、稲作をしながら川そばの低地にむらを作っていたことがわかります。

古墳時代になると下鳥渡地区に古墳が作られ、福島は豪族が支配していたことがわかりますが、古墳時代の終わり頃にはとくに、盆地の東側斜面に小さな古墳がたくさん作られるようになります。

また、古墳時代の終わりには有力豪族により、お寺が建てられます（腰浜町・腰浜廃寺)。

奈良時代から平安時代にかけては福島は国家の支配下にありました。信夫郡の郡役所も置かれていたようです（北五老内町・北五老内遺跡)。

古代の終わりに飯坂町大鳥城を拠点に強い力を持っていた佐藤氏は、鎌倉幕府の勢力によってその力を失い、以後、伊達氏の支配の中に取り込まれていきます。この期間には杉目城（福島城）や大森城をはじめとして大小さまざまな城館が作られました。

江戸時代には福島城を中心とした支配体制ができあがりますが、福島の統治は幕府領―福島藩（本多氏）―幕府領―福島藩（堀田氏）―幕府領とめまぐるしく変わったのち、18世紀になって板倉氏の支配下になります。

ふくしまじょうあと

福島城跡

■遺跡名……福島城跡
■所在地……福島市杉妻町
■時　代……室町時代～江戸時代
■調査年……平成14年

詳しくは
ふくしまの歴史３近世
Ｐ２～21に掲載

福島城は、現在の福島県庁周辺にあった城です。古くは大仏城、また杉目城とも呼ばれ、室町時代から戦国時代にかけては伊達氏の有力な支城となっており、独眼龍で有名な伊達政宗の祖父にあたる伊達晴宗の隠居城にもなりました。江戸時代には米沢藩上杉氏の支城となった後、本多氏・堀田氏・板倉氏を通じて福島藩の居城となり、信夫地方の行政の中心として明治時代まで存在しました。現在も、県庁南側駐車場に当時の土塁が残っています。平成14年に福島警察署部分が発掘調査され、福島城の堀跡が確認されました。このとき、伊達家家紋である三引両（みつびきりょう）が描かれた漆器がみつかっています。

▲発掘調査でみつかった堀跡
発掘調査が行われた場所はかつての福島城大手門の東側のあたりです。福島城の堀は時代によって何度か作りかえられました。この堀は、調査でみつかった最も古い段階で、伊達家家紋である三引両が描かれた漆器がみつかりました。

▲三引両が描かれた漆器
右が椀、左が鉢です。○の中に３本の縦線を描く三引両の家紋は、「竹に雀」の家紋とともに伊達家でよく使われました。三引両の家紋の入った漆器は、山形県米沢市や宮城県仙台市などの伊達氏と関係の深い城館跡などからもみつかっています。

▲福島城の土塁
福島県庁南側の阿武隈川に面した駐車場には、現在も高さ2.5mほどの福島城の土塁が残っており、当時の様子をしのぶことができます。

▲福島城複合図
現在の県庁周辺の地図に、今に残る福島城跡の絵図を重ねたものです。（作図・鈴木啓　『ふくしまの歴史　３』より転載）

きたごろうちいせき・こしはまはいじあと

北五老内遺跡・腰浜廃寺跡

■遺跡名……北五老内遺跡
■所在地……福島市北五老内町
■時　代……奈良時代～平安時代？

■遺跡名…腰浜廃寺跡
■所在地…福島市腰浜町・浜田町
■時　代…奈良時代～平安時代
■調査年…昭和35～38年、53～55年、57年

詳しくは
ふくしまの歴史１原始・古代
Ｐ219（北五老内遺跡）
Ｐ139・145・154・163・166・232・254（腰浜廃寺跡）に掲載

北五老内遺跡　北五老内町周辺では、昔から焼米（やけごめ）が発見されていました。花園郵便局北側のガソリンスタンド建設敷地からも、溝の中から籾殻（もみがら）がついたままの焼米が、約30cmの厚さで発見されました。焼米は、奈良時代から平安時代の郡役所（ぐんやくしょ）の倉に納められていた米が焼けたと考えられています。北五老内町周辺に郡役所があった可能性が高いのですが、郡役所の建物や、建物に使われた瓦や郡役所で使われた土器などはまだ発見されていません。

腰浜廃寺跡　現在の福島東高校の東に、今から1,340年前頃に地元の豪族（ごうぞく）によって建てられた寺がありました。腰浜廃寺です。これまでの発掘調査で、寺の中心的な建物である金堂（こんどう）と考えられる建物のほか、西側を区画する溝や掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）が発見されていますが、建物の配置など、全体の様子は明らかになっていません。福島東高校東側の道路付近が西の境界（きょうかい）で、東は福島成蹊高校グランドまでは広がっていないことが確認されています。

▲腰浜廃寺に使われた瓦
建物にふいた瓦では、蓮の花の文様（蓮華文（れんげもん）：左写真）と花びらが旋回（せんかい）しているような文様（花文（かもん）：右写真）の２種類の丸瓦（まるがわら）が発見されています。蓮華文の瓦は寺が建てられた当初に用いられたもので、岡島の宮沢窯跡（みやざわかまあと）で焼かれました。花文の瓦は、平安時代になって大規模な改修が行なわれた際に用いられたもので、山口の赤埴窯跡（あかはにかまあと）で焼かれました。

いがらべいせき

五十辺遺跡

■遺跡名……五十辺遺跡
■所在地……福島市北ノ前・館ノ内
■時　代…古墳時代～平安時代　鎌倉時代・江戸時代
■調査年…昭和61年、平成13年、平成16年

詳しくは
ふくしまの歴史１原始・古代
P 180・216・219に掲載

五十辺遺跡は阿武隈川からほど近い、岩谷下交差点の北東に広がる遺跡です。これまでに３回の発掘調査が行なわれ、古墳時代～平安時代のむらの跡がみつかっています。平安時代の家が最も多くみつかっており、なかでも９世紀中頃から後半（約1,150～1,100年前）にかけて多くの竪穴住居（たてあなじゅうきょ）が存在していました。

平安時代の一軒の家からは「郡」と書かれた土器がみつかっています。遺跡の南には、平安時代の郡役所であると考えられる北五老内（きたごろうううち）遺跡が存在していることから、五十辺遺跡のむらはこの古代の役所と関連があったとも考えられています。

また、隣接する五十目館跡（いがらめたてあと）は、鎌倉時代の文書の中に五十目七郎高重（いがらめしちろうたかしげ）の居館（きょかん）と書かれています。直接結びつけることはできませんが、調査では江戸時代に埋められた堀（ほり）と土塁（どるい）がみつかっています。

▲文字が書かれた土器
竪穴住居のカマドからみつかった土器に「郡」と刻まれていました。「郡」は当時の郡役所である信夫郡家（ぐうけ）を表すと考えられています。

▲竪穴住居の調査
埋まっている土を少しずつ丁寧にはずしていきます。

▲カマド
カマドは古墳時代から使われており、ドーム形をしていました。煙を竪穴住居の外に出すための溝（煙道（えんどう））が作られています。また、カマドの基礎となる部分には補強のため土器が使われていました。

▲竪穴住居跡
１辺４mほどの四角い住居跡で、深さは20cmほどでした。奥の壁からは煙出しの煙道（えんどう）が長く延びているのがわかります。

かつくちまえはたいせき

勝口前畑遺跡

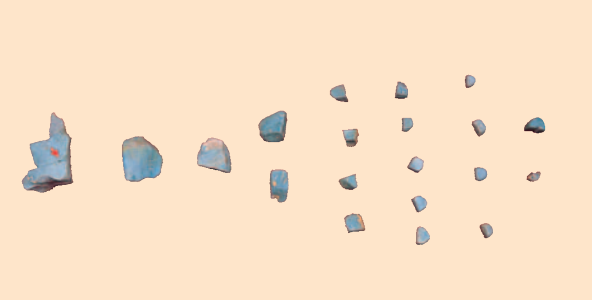
■遺跡名……勝口前畑遺跡
■所在地……福島市野田町道端・加賀屋敷、八島田字勝口ほか
■時　代…弥生時代・古墳時代　平安時代・鎌倉時代　江戸時代
■調査年…平成２～10年

詳しくは
ふくしまの歴史１原始・古代
P 87・88・116・118・121・122・126・176・212・215・226に掲載

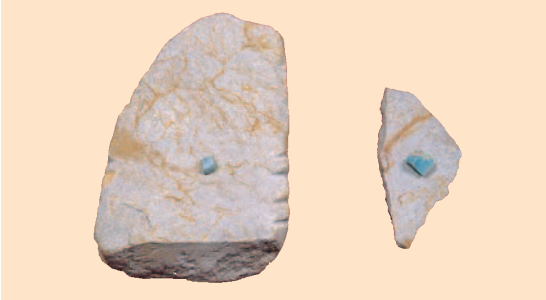
弥生時代

西部三育幼稚園の近くでは、首飾りに使われた勾玉が作られていました。勾玉を作る途中の石や原石を割ったかけらのほか、石を割る道具、磨る道具、穴をあける道具が発見されていますが、勾玉作りは短い期間に行なわれたようです。

このほかに、たくさんの弥生土器や土器に遺体や骨を入れた墓が発見されています。しかし、これまでの調査では、竪穴住居は発見されていませんので、大きなむらがあったかどうかはわかっていません。



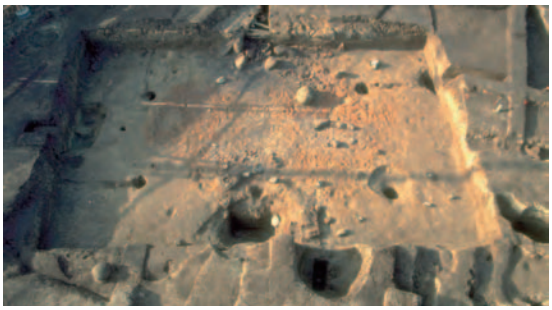
▲勾玉の作り方
勾玉は、長さが１㎝のもので、縄文時代からの伝統的な形でなく、弥生時代に朝鮮半島から伝わった形のものです。緑色の流紋岩が用いられ、原石を石で割り、１㎝の大きさの半円形にした後で、石の針を用いて穴をあけたようです。



▲勾玉製作の道具
石で割っただけでは表面がでこぼこしているため、写真にあるような砥石で磨いて滑らかにします。
砥石のほかに、石を割る道具や穴をあける道具（石針）なとが使われました。

古墳時代

竪穴住居と水田が発見されています。竪穴住居は４世紀と５世紀のものがありますが、５世紀のはじめ（約1,600年前）の竪穴住居では中央の炉で調理を行なっていましたが、５世紀の中頃（約1,550年前）の竪穴住居ではカマドで調理をするようになり、台所が家に出現しています。水田は竪穴住居が作られた区域より低いところで発見されていますが、現在の水田と比べると小さなものでした。水田の区域と竪穴住居のある区域の境では、石製模造品（鏡や剣などをまねて石で作ったまつりの道具）を使ってまつりを行なった場所があり、水田の豊作などを願ったようです。



▲竪穴住居跡
古墳時代には四角に地面を掘り、柱を立ててその上に屋根をかけた家でした。写真の竪穴住居は長い辺が７m35㎝、短い辺が４m79㎝の大きさです。奥の中央にはカマドが作られていました。細長い溝はカマドの煙を家の外に出すためのものです。

▲水田跡
２本の白い線が畦（あぜ）です。水田は１枚の面積が3.75～10.5㎡と小さなものです。全国でも古墳時代の水田がせまい面積のものであったことが確認されています。牛などを使った農作業が行なわれなかったため、小さな水田が作られたと考えられます。

平安時代

竪穴住居（たてあなじゅうきょ）、掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）、水田が発見されています。掘立柱建物は、倉として使われたものがありますが、多くは家として使われています。平安時代のむらでは、竪穴住居に住んだ人と、掘立柱建物に住んだ人がおり、むらの中の有力な人が掘立柱建物に住んだものと考えられます。勝口前畑遺跡では、４世紀と５世紀にむらがありましたが、６世紀～８世紀にはむらが営まれていません。９世紀になって再び、水田の新たな開発によってむらが作られました。土器には表面に文字が書かれているものがあり、文字を理解できた人が住んでいたことがわかります。

▲竪穴住居跡
古墳時代の竪穴住居と同じく、四角に地面を掘って、柱・屋根をかけた家が使われました。竪穴住居には写真のようなカマドが作られ、隣に物を入れる貯蔵穴（ちょぞうけつ）があり、現在の台所といえます。

▲大型掘立柱建物跡
勝口前畑遺跡では、平安時代の掘立柱建物としては市内で最大の建物が発見されています。人が立っているところが柱の穴です。むらの中の有力な人が住んだ家と考えられます。

やまのしたいせき

山ノ下遺跡

■遺跡名……山ノ下遺跡
■所在地……福島市渡利字山ノ下ほか
■時　代……縄文時代・平安時代
■調査年……平成６～８年

詳しくは
ふくしまの歴史１原始・古代
Ｐ41・181に掲載

山ノ下遺跡は渡利の椿山（つばきやま）の北側に広がる大規模な遺跡で、過去４回調査が行なわれています。調査されたのはいずれも椿山のふもとに近い部分で、縄文時代に掘られたと考えられる、けものをとるための落とし穴がたくさんみつかっています。

また、それ以外にも、フラスコのように底のほうが広くなっている、木の実などを貯蔵（ちょぞう）しておくための穴もみつかっています。

椿山のふもとは、縄文時代には狩りを行なったり、木の実をためておいたりする生活の場として利用されていたようです。周辺には大きなむらがあったのかもしれません。

◀たくさんの落とし穴
縄文時代に掘られた大きな穴がたくさんみつかっています。椿山の北側にはこのような穴が一面に広がっていたのかもしれません。

また、平安時代の土器もみつかっています。周辺からは岩崎町遺跡など平安時代のむらがみつかっていますので、山ノ下遺跡の中にも平安時代のむらがあるかもしれません。

▲大きな土器と小さな土器
むらの跡の調査ではなかったため、みつかった土器はそれほど多くはありませんが、縄文時代後期の大きな土器と小さな土器が一緒にみつかっています。

▲調査風景
地面を平らに削って、穴の跡を探しているところです。落し穴の大きさがよくわかります。

いわたいせき

岩田遺跡

■遺跡名……岩田遺跡
■所在地……福島市鳥谷野字岩田
■時　代……古墳時代・平安時代
■調査年……平成２年

詳しくは
ふくしまの歴史１原始・古代
P 122・126に掲載

国道４号線と国道115号線の交差点から南東、阿武隈川西岸沿いにある遺跡です。発掘調査をしたのは、遺跡の一部分でしたが、竪穴住居（たてあなじゅうきょ）や当時使われていた土師器（はじき）とよばれる土器がみつかり、古墳時代と平安時代のはじめ頃のむらの跡であることがわかりました。

▲発掘調査の様子

古墳時代のむらでは、家の跡とともにまつりの道具とそれを作った作業場の跡がみつかりました。

まつりの道具は石製模造品（せきせいもぞうひん）とよばれる、石で剣や鏡をかたどったもので、あいている穴にひもを通して、木の枝などに下げて使ったと考えられています。

平安時代のむらからは、鉄製の道具を作った作業場の跡がみつかり、むらの中に鍛冶屋（かじや）がいたことがわかりました。

これらのむらは、さらに南にも広がっていることがわかっています。

この遺跡は、水はけがよい小高い地形の上にあり、川にも近いため、古代から人が住みやすい場所だったようです。

▲まつりの道具
やわらかな石を加工して、鏡や剣の形を模造したミニチュアで石製模造品とよばれています。

▲鉄の道具を作った作業場の跡
石の上で、はがねをかなづちでたたいて、刃物や農具を作っていました。

いわさきちょういせき

岩崎町遺跡

■遺跡名……岩崎町遺跡
■所在地……福島市渡利字岩崎町
■時　代……奈良時代～平安時代
■調査年……平成元年～２年

詳しくは
ふくしまの歴史１原始・古代
Ｐ220に掲載

渡利小学校の東、阿武隈川東岸沿いに広がる遺跡です。国道114号線渡利小倉寺バイパスが遺跡のほぼ中央をとおっています。このバイパス道路部分の発掘調査が行なわれました。竪穴住居（たてあなじゅうきょ）・掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）・溝（みぞ）などが多数みつかり、奈良～平安時代（約1,300～1,100年前）の大きなむらの跡であることがわかりました。

▲発掘調査の様子
バイパス道路の部分を調査しました。写真奥に見える山は信夫山です。

▲重なり合う竪穴住居跡
竪穴住居は何度も建て替えられました。右側があとから建てられた竪穴住居です。

当時の生活用具もたくさんみつかりました。最も多かったのは土師器（はじき）と須恵器（すえき）ですが、鉄製の小刀・斧（おの）・鎌（かま）・鍬（くわ）の先・矢じり・紡錘車（ぼうすいしゃ）（糸を紡（つむ）ぐ道具）などがみつかり、鉄の道具が一般の人たちにも広く使われていたことがわかりました。また、墨（すみ）で文字が書かれた土器もみつかっています。このむらに文字を読み書きできる人がいたことを示すものです。

周辺には、他にも平安時代の遺跡があり、阿武隈川に沿って広い範囲にむらがあったと考えられます。

▲捨てられた土器
丸く掘られた穴の中から平安時代の土器がまとまってみつかりました。

ぼうのうちいせき

房ノ内遺跡

■遺跡名……房ノ内遺跡
■所在地……福島市黒岩字浜井場・堂ノ後
■時　代……平安時代
■調査年……昭和62年

詳しくは
ふくしまの歴史１原始・古代
Ｐ218に掲載

杉妻小学校の北東約500m、阿武隈川西岸にある遺跡です。発掘調査では竪穴住居（たてあなじゅうきょ）と掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）がみつかり、平安時代のはじめ頃（約1,200年前）のむらの跡であることがわかりました。

▲南から見た房ノ内遺跡
中央が発掘調査をした場所です。正面中央は弁天山、右側が阿武隈川があります。

▲空から見た房ノ内遺跡
整った形の掘立柱建物跡が見えます。計画的に配置されている様子がわかります。

当時の一般的な住居である竪穴住居のほかに、掘立柱建物が３棟みつかりました。掘立柱建物の床面積は35～37㎡ほどで、普通の竪穴住居の２～３倍ほどの大きさがあり、むらの有力者が住んでいた建物であると考えられます。

▲大きな掘立柱建物跡
一辺が6.1mの正方形の掘立柱建物です。並んだ四角い穴の中に柱が立てられていました。

黒岩地区は福島市内でも古墳時代から平安時代にかけての遺跡がとくに集中している地域で、房ノ内（ぼうのうち）遺跡のすぐ南には八郎内（はちろううち）遺跡・八郎内古墳群（はちろううちこふんぐん）が、北側には浜井場（はまいば）遺跡・浜井場古墳群（はまいばこふんぐん）・二ツ石（ふたついし）遺跡があります。

はちろううちいせき

八郎内遺跡

■遺跡名……八郎内遺跡
■所在地……福島市黒岩字八郎内
■時　代……古墳時代
■調査年……平成６年

詳しくは
ふくしまの歴史１原始・古代
P 124・126・180に掲載

杉妻小学校の東約600m、阿武隈川西岸沿いにある遺跡です。かつて３つの古墳があったといわれる場所ですが、現在は畑になっています。発掘調査では竪穴住居がみつかり、古墳時代後期（約1,450年前）のむらの跡であることがわかっています。また、はっきりした時期はわかりませんが古墳の周溝もみつかっています。

▲西から見た八郎内遺跡
四角形にくぼんでいるところが竪穴住居跡です。
写真奥に阿武隈川があります。

▲火災にあった竪穴住居跡
屋根や柱に使われていた木材が、焼けて炭になった状態で、床に残された土器とともにみつかりました。

竪穴住居の中には一辺の長さが８ｍもある大きなものがありました。畳38枚分の大きさで、むらの有力者の家と考えられます。また、火災にあった家も２軒みつかり、突然のことだったのか杯や甕などの土器が床に置かれたまま残されていました。

▲発見された古墳
墳丘はこわされていて、まわりの溝だけが残っていました。

古墳はすでに墳丘がなくなっており、周溝が残っているだけでしたが、直径10ｍほどの円墳と考えられます。

▲火災住居で発見された土器
火災にあった家には杯や鉢、甑など、当時の食器や調理道具が残されていた。不意の火災で運び出せなかったのであろうと考えられます。

はまいばこふんぐん

浜井場古墳群

■遺跡名……浜井場古墳群
■所在地……福島市黒岩字浜井場
■時　代……古墳時代
■調査年……平成14年

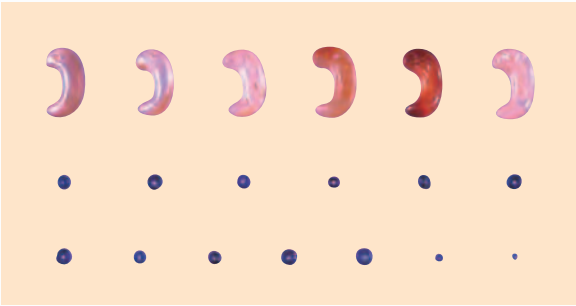
詳しくは
ふくしまの歴史１原始・古代
P 107・114・145に掲載

浜井場古墳群は蓬莱橋の西側にあります。現在は平らになっていますが、周辺の調査によって以前はたくさんの古墳があったことがわかっています。店舗建設に伴って２基の古墳の調査を行ないました。全体の調査ができた浜井場１号墳は、検出（けんしゅつ）された形から約1,450年前に作られた「前方後円墳（ぜんぽうこうえんふん）」であると確認されました。後円部（こうえんぶ）には遺体が葬（ほうむ）られている石室（せきしつ）があり、横に入口があることから「横穴式石室（よこあなしきせきしつ）」とよばれています。石室は床が２面確認されました。このことから２回葬儀（そうぎ）（追葬（ついそう））が行なわれた可能性が考えられます。副葬品（ふくそうひん）は、勾玉（まがたま）・鉄斧（てっぷ）・鉄刀（てっとう）・鉄鏃（てつぞく）・土師器（はじき）などが出土しています。

この古墳に葬られた人物は、市内の南側を治（おさ）めていた有力な豪族（ごうぞく）だったと思われます。

▲古墳の全景
大きさは、全長23.0mで古墳の周りには幅が1.6～4.0mの周溝（しゅうこう）（溝）後円部右側には全長５m40cmの石室があります。

▲１号墳の石室
遺体を葬った石室です。手前側が入口で本来は天井に石が乗っています。横方向に入口があることから「横穴式石室」とよばれています。石室から勾玉がみつかっています。床が２面あって、古い床には２～５cmの玉石が敷かれ、新しい床には20～30cmの平らな石が敷かれていました。



◀出土した玉
浜井場１号墳の石室からみつかった勾玉とガラス小玉です。写真上は勾玉で大きさは約3.5cmでメノウを使って作られています。写真下はガラス小玉です。大きさは0.4～0.8cmです。

がくだんいせきぐん

学壇遺跡群

■遺跡名……学壇遺跡群
■所在地……福島市黒岩字弥生、伏拝字沼ノ上
■時　代…旧石器時代・縄文時代・古墳時代
■調査年…平成元年～平成５年

詳しくは
ふくしまの歴史１原始・古代
Ｐ13～15に掲載

旧石器時代

▲発掘調査の様子

学壇遺跡群では、福島盆地で最も古い２万年前から１万２千年前の人の生活の跡が広い範囲でみつかっています。定住した場所ではなく、道具を作っていた場所と考えられています。発見された石器は、旧石器時代特有のナイフ形石器・石刃・掻器（スクレイパー）・細石刃などがあります。細石刃は木に溝を掘り、小さなナイフのような石器をたくさん差し込んで使っていました。また、石器を作ったときの小さなかけらもたくさんみつかっています。

▲発見された石器
石刃とよばれ、石を割ってこのような縦に長い形にし、これを加工して石器にします。写真右で長さが約９㎝です。

▲石器が発見された様子
黄色の箸が立っている地点から石器が出土しています。このような石器が集中してみつかる場所をブロックといい、学壇遺跡群では合計62カ所確認されています。

縄文時代

丘陵全体で落とし穴がみつかりました。また、縄文時代早期から後期の土器も出土していますが、縄文時代の竪穴住居はみつかりませんでした。この

▲落とし穴
落とし穴は丘陵全体で100基以上みつかっています。底に掘られた３つの穴はけものの足を絡ませるために杭を立てた穴です。大きさは、１ｍ前後から４ｍを超えるものもみつかっています。

ことから、この場所は狩り場として縄文時代早期から後期までの４千年間に何度か使われていたものと思われます。

古墳時代

▲発見された古墳
丘陵南斜面にあった沼ノ上１号墳です。丸い形をしていることから円墳とよばれています。真ん中にある遺体を葬った石室は、中央部分が膨らむ「胴張形横穴式石室」です。石室入口（羨道）から蕨手刀がみつかっています。石室は長さ５ｍ、幅１ｍ、高さ1.5m程の大きさです。

学壇遺跡群を含む阿武隈川沿岸には数多くの小さな古墳が確認されています。古墳は、もともと豪族の大きなお墓ですが、古墳時代の終わり頃には小さな古墳がまとまってたくさん作られました。

学壇・沼ノ上北部古墳群では13基の小さな古墳が確認されています。そのうち10基の古墳の調査を行ないました。古墳はすべて丸い形の「円墳」です。大きさは直径10～14mで、まわりには幅２～４ｍの周溝がありました。石室は長さ３～５ｍ、幅は約1.5mです。沼ノ上１号墳からは、蕨手刀・直刀・鉄鏃・土師器・須恵器等が発見されました。古墳時代後期（約1,300年前）に作られた古墳と考えられます。学壇１号墳は沼ノ上古墳群の北東側の丘陵にある円墳で、碧玉製の勾玉・水晶の切子玉・ガラス製の小玉・鉄鏃・須恵器が発見されました。同じく古墳時代後期（約1,300年前）に作られたと考えられます。

▲蕨手刀
古墳時代後期（1,350年前）から平安時代前期まで作られた鉄の刀です。
柄頭（持つところの末端部）が蕨のように曲がっているところからこの名がついています。精錬方法が日本刀と同じことから日本刀の原点と考えられています。この刀は蝦夷と戦っていた地域で数多くみつかっています。

▲弥生公園
手前のさくの中に学壇古墳群の一部が保存されています。南福島ニュータウン内の一画にあります。

たかはたいせき

高畑遺跡

■遺跡名……高畑遺跡
■所在地……福島市南矢野目字高畑・古屋敷
■時　代…奈良時代・平安時代・江戸時代
■調査年…平成８年

詳しくは
ふくしまの歴史１原始・古代
Ｐ177に掲載

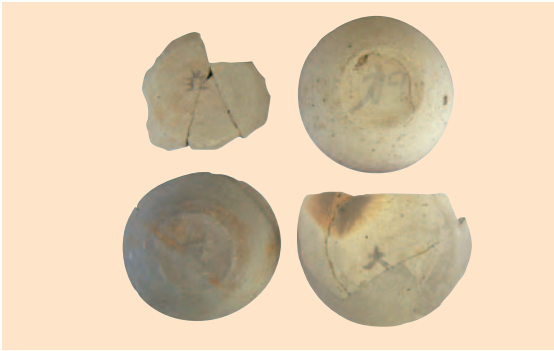
高畑遺跡は、国道13号線と農免道路の交差点の西側にあります。平成８年度に調査が行なわれ、奈良時代の終わり頃と平安時代のはじめ頃のむらの跡がみつかっています。

平安時代のむらからは、竪穴住居（たてあなじゅうきょ）のほか幅の広い溝（みぞ）がみつかっています。溝の中からはたくさんの土器がみつかっており、溝のまわりでまつりが行なわれたものと考えられます。また、溝（みぞ）からみつかった土器の中には墨（すみ）で文字が書かれた土器が数多く含まれることから、文字を読み書きができる人がいたことがわかります。

▲空からみた発掘調査区域
中央にある、幅が広い溝跡の中から土師器（はじき）・須恵器（すえき）がみつかりました。溝の左側にある四角いくぼみが奈良時代・平安時代の竪穴住居跡です。

▲奈良時代の竪穴住居跡
大きさが３m程の、比較的小さな住居です。地面を四角に掘りくぼめ、柱を立て屋根をかけました。カマドは東側にあり、煙を外に出す穴もみつかっています。

▲平安時代の溝跡
一番広い幅が7.7m、深さが50～68cm。たくさんの土師器・須恵器と共に石や木の杭（写真手前）がみつかっており、水をひき、量を調整する「堰（せき）」として使われたのかもしれません。



▲溝跡からみつかった墨書土器（ぼくしょ）
土器の表面に「大」・「加」・「福」・「邊」などの文字が書かれています。特に「大」や「加」など多くみつかりました。溝の近くでおまつりなどが行なわれ、その時に投げ捨てられたのかもしれません。

おやませんげんいせき

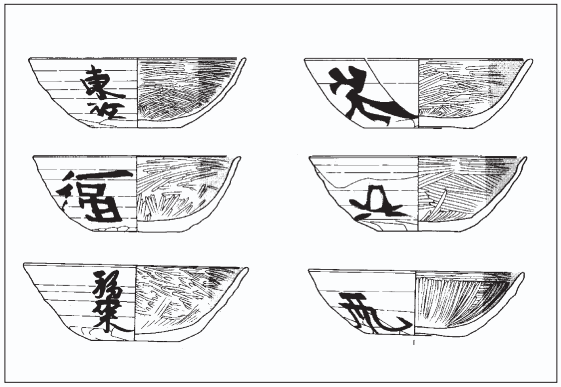
御山千軒遺跡

■遺跡名……御山千軒遺跡
■所在地……福島市御山字中屋敷
■時　代……平安時代
■調査年……昭和52年

詳しくは
ふくしまの歴史１原始・古代
Ｐ224に掲載

御山千軒遺跡は信夫山の北側、国道13号線から少し西側に入ったところにある遺跡で、東北新幹線の建設工事に先立って発掘調査が行なわれました。

発掘調査の結果、湿地のそばからたくさんの竪穴住居や掘立柱建物、井戸跡などがみつかり、奈良時代～平安時代にかけて、水辺にむらが作られていたことが明らかになりました。



▲文字の書かれた土器
水辺からは墨で文字の書かれた土器もたくさんみつかっており、水辺で儀式やおまつりなどが行なわれていたと考えられます。（福島県文化財調査報告書第109集より転載）

また、土器のほか、当時の人々が使っていた木の道具がたくさん残されていました。食事で使う木のお椀や折敷など、農作業で使う横槌、機織りに使う紡錘車や機織り機の部品、弓のほか、まつりで使う刀や馬の形に木を切り抜いたものなどがみつかり、それまでよくわからなかった当時の暮らしぶりを、より詳しく知ることができました。

◀発見された木器
木でできた道具は普通なら腐ってしまいますが、湿地であったため、水につかったまま空気にふれることがなく、長い間腐らなかったと考えられます。食器などのほか、下駄や機織りの部品などもみつかっています。
（福島県文化財センター白河館〈まほろん〉提供）

つきのわやまいちごうふん

月ノ輪山１号墳

■遺跡名……月ノ輪山１号墳
■所在地……福島市鎌田字月ノ輪
■時　代……古墳時代
■調査年……昭和63年

詳しくは
ふくしまの歴史１原始・古代
Ｐ112に掲載

月ノ輪山１号墳は福島盆地の北東の、阿武隈川に向って張り出した岡島・鎌田・瀬上を見おろす高台の上にありました。現在は月輪台団地になっているところです。

古墳は古くから知られており、調査開始前でも高さ３ｍほどの高まりが確認できました。発掘調査の結果、福島市内では最も規模の大きい石室（せきしつ）を持つ円墳（えんぷん）であることがわかりました。石室からは副葬（ふくそう）された頭椎太刀（かぶつちのたち）や直刀などの鉄製品のほか耳環（じかん）、勾玉（まがたま）とガラス玉などがみつかっています。

▲月ノ輪山１号墳全景
直径20m、高さ2.8mの大規模な古墳で、阿武隈川を見おろす高台に作られていました。

古墳の規模やみつかった頭椎太刀などから、この古墳に埋葬されたのは、近畿地方の政権とつながりのあった、当時の福島地方の中でも有力な豪族であったと考えられます。

▲月ノ輪山１号墳の石室
石室は割石を積んで作られ奥行きが11.3mと非常に大きな規模のものです。床には玉石（たまいし）が敷きつめられており、天井には巨大な石がのせられていたと考えられます。

▲復元された頭椎太刀（かぶつちのたち）
石室のなかからは鉄製の矢じりやガラス玉を使った首飾り、耳環などとともに、握（にぎ）りの部分に立派な飾りのついた儀礼（ぎれい）用の頭椎太刀が二振りもみつかっています。

かみのたいらこふんぐん

上ノ平古墳群

■遺跡名……上ノ平古墳群
■所在地……福島市岡島字上ノ平
■時　代……古墳時代
■調査年……平成８年

上ノ平古墳群については、平成８年度に工業団地造成に先立って２基の古墳の発掘調査が行なわれました。調査の結果、２基の古墳はともに円墳（えんぷん）で、遺体（いたい）を納めた石室（せきしつ）は中央が広くなる「胴張形横穴式石室（どうはりがたよこあなしきせきしつ）」とよばれる作り方であることがわかりました。古墳の中からは鉄製の直刀（ちょくとう）や馬具（ばぐ）のほか耳環（じかん）などがみつかっています。

▲古墳の全景
上空から見た上ノ平古墳群です。右側が上ノ平１号墳です。大きさは周溝を含めると１号墳で約15.6mです。２号墳は約11.0mです。周溝幅は１～３m程です。左側が２号墳です。両方とも石室の入口が南側です。

また、上ノ平古墳のある岡島地区には御春新田古墳群（おはるしんでんこふんぐん）や天神山古墳群（てんじんやまこふんぐん）、源氏山古墳群（げんじやまこふんぐん）などたくさんの古墳群があることもわかっています。

▲出土した耳環
１号墳からみつかった耳環で、銅芯（どうしん）を丸めて金メッキしたものです。左側の耳環で直径およそ２㎝、重さ10ｇです。

▲刀がみつかった様子
１号墳石室の床面から直刀が出土した写真です。鉄製で長さは74㎝あります。もう一振り直刀が出土しています。

だいはたいせき

台畑遺跡

■遺跡名……台畑遺跡
■所在地……福島市南矢野目字台畑ほか
■時　代…弥生時代・奈良時代・平安時代
■調査年…昭和63年、平成元年、平成８年

詳しくは
ふくしまの歴史１原始・古代
P 86・116・180・182・184・212・215・216・224に掲載

弥生時代

福島市で一番古い約2,000年前の水田が発見されています。福島市内でも、弥生時代に米作りが行なわれていたのです。石や木の道具で水田を作り、農作業をしていたため、現在の水田から比べると小さな水田です。水田を作った人が生活をしたむらはみつかっていません。

▲発見された弥生時代の水田
２本の白い線が畦です。畦で囲まれた所で稲を作りました。１枚の水田の面積は、大きなもので11.3㎡、小さなものでは1.93㎡しかありません。

▲須恵器窯跡
上が平安時代の溝で壊されていますが、長さは８m以上ありました。土でかまくらのような形を作り、中に須恵器を置いて薪を燃やして焼きました。中央の黒いものは燃料の薪が燃えて炭になったものです。その上の青い部分が土器を置いたところで、熱によって非常に硬くなっています。

奈良時代

今から1,250～1,200年前に台地上にはむらが作られますが、むらが作られる前には、台地東側の斜面に須恵器を焼いた窯があり、窯の近くの溝には失敗した須恵器が捨てられていました。須恵器は、奈良時代の前半に庶民の家ではほとんど使われなかったものですので、福島市内の役所やお寺で使うための須恵器を焼いた場所だったのです。

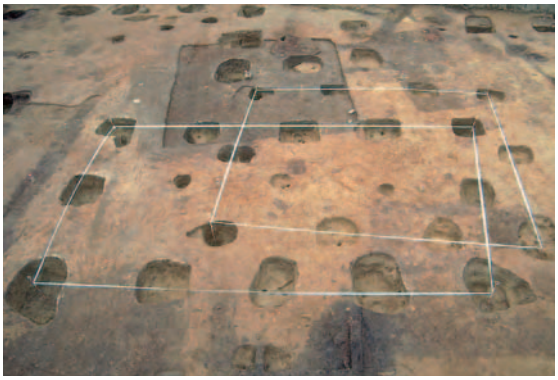
窯で焼かれた須恵器▶
左側が高台付杯と蓋（現在の茶わん）。右側は長頸瓶（酒などの液体を入れた容器）です。高温で焼かれたため硬く、色も縄文土器のような茶色でなく、青みがかった灰色をしています。

平安時代

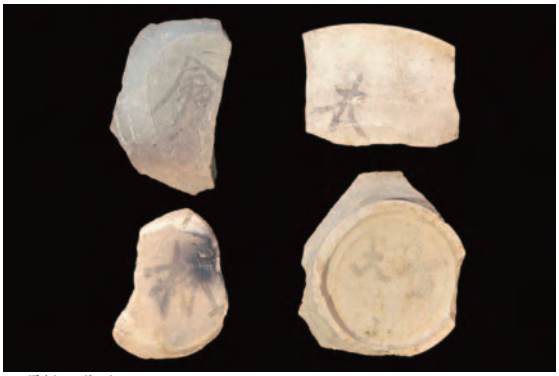
奈良時代のむらは平安時代まで続いて営まれ、竪穴住居(たてあなじゅうきょ)が31軒と掘立柱建物(ほったてばしらたてもの)が39軒発見されています。むらの中で有力な人が掘立柱建物に住むようになったのです。掘立柱建物の中には、家のほかに倉と考えられるものも存在していました。むらの北側には板を組み合わせた井戸も発見されています。台地の東側の低地では水田で稲作りが行なわれていました。台畑遺跡は、水田の開発に伴い作られたむらだったのです。水田そばの水路からは土器の表面に墨(すみ)で文字を書いた土器がたくさんみつかり、豊かな実りを祈(いの)ってまつりが行なわれたようです。

▲台畑遺跡の遠景
手前の黒いところで水田が営まれていました。その上の台地で竪穴住居や掘立柱建物が発見されました。水田の開発に伴って作られたむらだったのです。

▲平安時代の水田跡
弥生時代の水田が使われなくなってから、しばらくは水田はありませんでした。平安時代になって新たな水田が作られました。
平安時代の水田は、弥生時代の水田のような小さなものではなくなっています。



▲掘立柱建物跡
白い線で結んだのが建物の柱の並びです。２本の線があるのは、新しい建物が古い建物ほぼ同じ位置に建てられたからです。
台畑遺跡では、奈良時代の終わり頃から掘立柱建物が使われました。



▲墨書土器(ぼくしょどき)
土器の表面に「倉」「本」「林」「大」の文字が書かれています。平安時代になると、むらの中から文字が書かれた土器が発見されるようになります。このほかには「得」「得万」の文字が多く発見されました。

くらのまえいせき

倉ノ前遺跡

■遺跡名……倉ノ前遺跡
■所在地……福島市岡部字根深
■時　代……平安時代～江戸時代
■調査年……平成５年

倉ノ前遺跡は、福島盆地の東側、岡山小学校の北側にある東部学校給食センター周辺に広がる遺跡です。発掘調査は、東部学校給食センターが建設される前に行ない、平安時代から江戸時代にかけて昔の人が暮らしたむらの跡があったことがわかりました。

平安時代のむらでは、竪穴住居（たてあなじゅうきょ）が４軒発見されていますが、むらはもっと広がることがわかっています。みつかった竪穴住居では、小刀（こがたな）などを作っていた鍛冶炉（かじろ）の跡がみつかっています。

その他に、道の跡がみつかっています。道の跡は平安時代から鎌倉時代頃まで使われていた道の跡で、道の両側には排水などのための溝が掘ってありました。

◀倉ノ前遺跡の発掘調査現場
中央の赤い範囲の部分が発掘調査現場です。
その上の緑色の水田地帯は昔、阿武隈川が流れていた跡で、そのすぐ近くに倉ノ前遺跡が広がっています。

▲平安時代の竪穴住居跡
大きさは１辺が約４ｍの大きさです。黒く見える部分が鍛冶炉（かじろ）の跡で、不要になった鉄滓（てっさい）がたくさん出土しました。

▲土器出土の様子
平安時代の竪穴住居カマド付近からは、煮炊きに使った土師器（はじき）の甕（かめ）などが出土しました。

もとうちたてあと

本内館跡

■遺跡名……本内館跡
■所在地……福島市本内字舘・南古舘・北古舘
■時　代……平安時代・鎌倉時代 江戸時代
■調査年……平成15年

詳しくは
ふくしまの歴史２中世
Ｐ220に掲載

本内館跡は鎌田小学校の南東に位置している館跡です。東西80m、南北60mの大きな館で、江戸時代には東側に奥州街道が通っていました。館跡の一番北東の部分について発掘調査を行ない、土塁や堀跡、建物跡のほか、江戸時代の井戸跡などがみつかりました。また、みつかった土塁や堀は、江戸時代の絵図面に描かれている本内館に関するものであることがわかりました。

土塁は現在も本内八幡神社や正福寺に残っており、当時の面影を残しています。

▲本内館跡の全景
中央の高い木々で囲まれた部分が館の中心部です。南北に長く、鍵のような形をしています。

▲本内館跡の発掘調査現場
発掘調査が行なわれた場所は、館跡の北東部分です。土塁や堀跡などがみつかっています。

▲本内館跡でみつかった井戸跡
直径１m、深さ1.9mの石組みを持つ井戸です。
石組みは上の部分がこわされており、土と一緒に埋められていました。

▲本内館跡に残る土塁
土で作った高い塀と堀で屋敷を囲みました高さは２mあります。

かまたたてあと

鎌田館跡

■遺跡名……鎌田館跡
■所在地……福島市鎌田字古館
■時　代……鎌倉時代～戦国時代
■調査年……平成７年

詳しくは
ふくしまの歴史２中世
Ｐ218に掲載

鎌田小学校の真北約200mの位置にある武士の館の跡です。二重の土塁と堀に囲まれている館の跡で、主郭（館の主の住まいがあった場所）は現在、鎌秀院というお寺の境内になっています。伝承では、この館は鎌倉時代に築かれたとされますが、定かではありません。館に住んだのは鎌田氏という武士の一族で、戦国時代には伊達氏の家臣となっていたようです。

▲現在の鎌田館跡
農免道路から見た鎌田館跡です。高い土塁が今もよく残っています。

▲広く深い堀跡
幅約11m、深さ約３mの堀跡で、堀の底は低い土手で区切られています。

▲堀跡からみつかった小柄
刀のさやの部分にさしそえる小刀です。この館に武士が住んでいたことを物語っています。

発掘調査では、戦国時代の終わり頃まで使われていたとみられる大きな堀跡がみつかりました。深さは３m近くあり、当時は水が引かれていたことがわかりました。堀の中からは、小柄・包丁・折敷（食事用の四角いお膳）・天目茶碗（茶の湯で使う茶碗）などがみつかっていて、武士の暮らしをうかがうことができます。

とみつかまえいせき

富塚前遺跡

■遺跡名……富塚前遺跡
■所在地……福島市丸子字富塚前
■時　代……古墳時代･鎌倉～室町時代
■調査年……平成16・18・19年

詳しくは
ふくしまの歴史２中世
Ｐ65に掲載

富塚前遺跡は、福島商業高校の西側に広がる遺跡です。これまでの発掘調査により、古墳時代・平安時代にむらがあったことがわかりました。

古墳時代のむらでは、竪穴住居はすべて川砂に覆われて埋まっており、当時は洪水の被害が大きかったことをうかがわせます。また、当時流れていた小川の跡から、多数のつぶれた土器がまとまってみつかりました。まつりや、おまじないをした跡かもしれません。

鎌倉時代～室町時代のむらは、それぞれの屋敷が溝によって区画されていたようです。当時の人が使っていた陶磁器などがみつかっています。

▲みつかった竪穴住居跡
富塚前遺跡では、おおよそ６ｍ四方に掘りくぼめ、柱を立てて上屋を上げ、北側（写真奥）にカマドを作る例が多いようです。

▲カマドの様子
カマドは砂と粘土を交互に積んで、ドーム状に作られていました。みつかったときは、天井がつぶれており、カマドの基礎の部分と煙を家の外に逃がす煙道が残っていました。また、カマドの中に土師器が置かれてありました。

▲小川の跡から土器がみつかった様子
煮炊きに使う「甕」や、食器に使う「杯」が小川の一ヶ所からまとまってみつかりました。

▲鎌倉時代～室町時代の遺物
右上が中国から輸入された青磁碗、その下が白磁皿、左側の茶色い陶器は現在の愛知県瀬戸市で作られた大型の壺です。右下の小型の仏像は、千手観音と思われます。

あおやぎいせき

青柳遺跡

■遺跡名……青柳遺跡
■所在地……福島市瀬上町字青柳
■時　代……弥生時代
■調査年……昭和52年

詳しくは
ふくしまの歴史１原始・古代
Ｐ84に掲載

青柳遺跡は摺上川との合流地点近くの阿武隈川西岸に立地し、青柳神社の北東側に位置します。瀬上東部地区の区画整理事業に伴なって調査が実施されました。

調査の結果、５個の弥生土器が一緒に埋められていた穴がみつかりました。

▲青柳遺跡の再葬墓
弥生土器の壷は一つの穴に５個一緒に埋められていました。土器の中には骨が残っていなかったので、腐ってしまったものと考えられます。

▲埋められていた土器
どれも薄手で文様の少ない簡素なものです。縁の部分と胴部の上のほうに、わずかに縄目がつけられているもので、実用品として使っていたものをそのあとでお墓に使ったと考えられます。

これは亡くなった人をいったん土に埋めたあと、骨になってから取り出して土器の中に納めて穴に埋める、再葬墓とよばれるお墓で、弥生時代に東北地方の南部で流行しました。

また、隣接する余目地区にも孫六橋遺跡という弥生時代の遺跡があります。そこからは、大陸から伝わってきた形の石器がみつかっており、こうした道具を使って稲作中心の生活をしていたと考えられます。

▲磨製(ませい)石斧
(左)ノミ形石斧、(中)扁平片刃石斧、(右)太形蛤刃石斧。宮代・孫六橋遺跡出土。(福島県文化財センター白河館〈まほろん〉蔵)

みやしろたてあと

宮代館跡

■遺跡名……宮代館跡
■所在地……福島市宮代字屋敷畑
■時　代……平安時代～鎌倉時代
■調査年……平成９年

詳しくは
ふくしまの歴史２中世
Ｐ222に掲載

宮代館跡は東北本線東福島駅にほど近い、宮代の日枝（ひえ）神社の北東に位置します。

現在は畑になっており、土塁（どるい）と空堀（からぼり）の一部が残っているだけですが、明治時代に書かれた書物には、「かつては土塁と堀に囲まれた200m四方ほどの館跡（たてあと）があったと伝えられている」と書かれていますが、詳しいことは不明です。

▲宮代館跡土塁
館跡東側の土塁は空堀をはさんで二重になっている部分があります。また、北側では100メートルほどの長さで残っています。

発掘調査は館跡の外側の、隣接する日枝神社の東側にあたるところで行なわれ、かわらけとよばれる宴会で使われる素焼きの器がたくさんみつかりました。このことから、鎌倉時代のはじめ頃に宮代館跡や日枝神社の付近で、たくさんの人が集まる機会がもたれたことがわかり、この地区では重要な拠点であったことがわかります。近年、館跡の北側を試掘調査した際にもそれを裏付けるような成果が得られているようです。

◀かわらけ
素焼（すや）きの浅い器で、直径７～15cmほどです。宴会（えんかい）など人の集まる場所で使われるものですが、使い捨てなので一回ごとに全部捨てられます。

ようごせつめい

用語説明

円　　墳……円形の古墳。

頭椎太刀……まっすぐで長い刀身をもち、持つところの先端に握りこぶしのような飾りのついた刀。金メッキがほどこされ、儀式など特別な時に偉い人が持つ。

カ　マ　ド……古墳時代から始まった、煮炊きをするために火を使うところ。(図1)

かわらけ……平安時代の終わり頃から使われ始めた素焼きの小皿で、宴会などで使われる使い捨てのうつわ。

古　　墳……土を盛って作ったお墓で、丸く作ったものを円墳、四角くつくったものを方墳、丸と四角を組み合せたものを前方後円墳とよぶ。

金　　堂……お寺の中心となる建物の一つ。

細　石　刃……石刃の中で、旧石器時代の終わり頃に作られたとくに小さいもの。棒や骨に溝を掘って、そこに埋め込んで使う。

耳　　環……古墳時代に豪族が身につけていた丸い環で、福島市でみつかっているものの多くは銅に金メッキされている。

周　　溝……古墳の外側に古墳をとりまくように掘られた溝。

縄文土器……縄文時代に使われた素焼きの器で、火にかけて煮炊きの時に使われたものが多い。外側に縄をころがして文様をつけたものが多い事からこの名前がついた。

石　　室……石をつんで作られた部屋のことで、古墳の中で遺体を埋葬する部分。

石製模造品……まつりで使われる刀や鏡をまねて、石で小さく作ったもの。古墳時代に使われた。

須　恵　器……古墳時代のはじめに朝鮮半島から伝えられた土器で、ロクロを使って作り、窯で焼かれた。茶碗のような杯、酒を入れた壺、ものを貯蔵するための甕などがある。

前方後円墳……上から見ると四角（方）と丸（円）を組み合せた形の古墳。市内には浜井場１号墳や上条古墳などがある。

掻　　器……皮から脂肪をかきとったり、骨から肉をはがしとったりするときに使われる石でつくった刃物。

打製石斧……石を打ち欠いて作った、木を伐るための斧で、木の柄にくくりつけて使う。

館(舘)……武士や有力者の住んでいた場所で、堀や土塁で区画された中にいくつかの建物が建てられていた。

竪穴住居……地面を掘りくぼめて屋根をかけた住居で、床が地面より低くなる半地下式の住居跡。（図２）

彫刻刀形石器……木の棒などに溝を彫るときに使う石器。

直　　刀……日本刀とちがって反りがなく、まっすぐで長い刀。

杯……お椀のような形をした、食事のときに使う土器

土　　塁……防御や区画のために土をつんで作った長い土手。

土　師　器……古墳時代から平安時代のあいだ使われた土器で、茶碗のような杯、鍋のかわりに煮炊きに使われた甕、そこに穴のあいた蒸し器である甑などがある。

碧　　玉……不純物のまざった不透明な石英で、色が美しく光沢があるため飾り物などに使われる。

掘立柱建物……主に倉庫や有力者の住まいとして使われた建物で、竪穴住居のように地面を掘らずに、柱を立てる穴だけを掘って作る木造の建物。（図３）

堀　　……防御や区画のために掘られた大きな溝で、水の入っていないものを空堀とよぶ。

矢　じ　り……狩りや戦争などで使われる矢の、先端の部分をさす。縄文時代には石で作った矢じりが用いられ、金属が使われるようになってからは銅や鉄で作られるようになった。

弥生土器……弥生時代に使われた土器で、火にかけて煮炊きに使われるほか、貯蔵に使われる壷やフタなどもあった。東京都弥生町から発見されたのでこの名前がついた。

蕨　手　刀……持つところの端が蕨のように丸く巻いていることから名前のついた、実戦用の短い刀。

図１　カマド

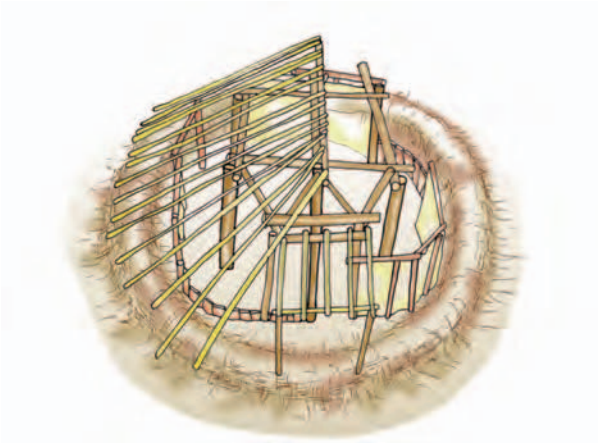


図２　竪穴住居

図３　掘立柱建物

全国の主な出来事と福島市内の遺跡年表

全国の主な出来事			福島市内の遺跡年表
氷河期が終わる		旧石器時代	学壇遺跡
土器、弓矢の使用 竪穴住居の出現	10000 年	縄文時代	仙台内前遺跡 宮畑遺跡 南諏訪原遺跡
稲作・金属器の使用が始まる 各地に小さな国ができる	300 年 紀元前 紀元後	弥生時代	青柳遺跡 勝口前畑遺跡
大和国家の統一が進む 古墳が作られる 法隆寺が作られる 大化の改新	300 年	古墳時代	鎧塚遺跡 月ノ輪山１号墳 腰浜廃寺
奈良に都が移される 荘園ができ始める	710 年	奈良時代	台畑遺跡
京都に都が移される 藤原道長が摂政になる 平氏が滅びる	794 年	平安時代	岩崎町遺跡
源頼朝が征夷大将軍となる 元寇（文永の役、弘安の役）	1192 年	鎌倉時代	大鳥城跡
足利尊氏が征夷大将軍となる	1338 年	室町時代	
豊臣秀吉が全国を統一する 関が原の戦い		戦国時代	鎌田館跡
徳川家康が征夷大将軍になる	1600 年	江戸時代	福島城跡 岸窯跡
明治維新	1868 年	明治時代	
	1912 年	大正時代	
	1926 年	昭和時代	
	1989 年	平成時代	

市内発掘調査成果

発行者　福島市教育委員会
発行日　平成20年３月